

1. 新人戦優勝

2年生 井上 翔太

私にとって新人ライダー選手権はローズカップ以来の大きな大会でした。今回は新人戦の当日の話よりもそれまでの経緯を主軸に書きたいと思います。

新人戦という存在を身近に感じ始めたのは1年生の夏の福井合宿でした。というのも、私は夏の福井合宿の撤収日に森川監督から補欠選手を言い渡されていたからです。先輩たちが色々な大会に出る中、常に大会の緊張感をもってライダーを操縦するなど、1年生だった私には想像できませんでした。

結局その年に私は出場しませんでした。もしかしたら自分が出るかもしれないという思いから心の準備はしていました。

その次の年、これもまた夏の福井合宿だったと思います。私と川上が選手として選ばれました。私は、「今の腕なら東海と関西で1番になれば上等だ」と思っていました。しかし、その目標を掲げるにつれて、「目標が低すぎる。オリンピック選手でも常に優勝を目指して精進しているのになぜ目指さない」と指摘されて、「なるほど、どんな種目であれオリンピック選手になるほどレベルの高い人たちでさえ高い目標を掲げて精一杯やっているのに、レベルの低い自分が目標を低くして、精一杯やらなくてどうする」と感じ始めました。

それからというもの、新人戦までの毎週土日は木曽川滑空場の外人参加で他大学にお邪魔してもらいながら宮地教官の指導のもと全力でトレーニングしました。フライトは常にうまくいった訳ではありませんでしたが、常にフライトのイメージを薄れさせないように毎日イメージフライトを

しました。(1日イメージフライトで10発は飛びました。(笑))

その効果もあってかフライト毎に成果を感じられる様になり、新人戦直近の訓練では、このフライトが本番でもできれば少なくともいい順位には食い込めるだろうという自信を持ち始めました。

新人戦当日、北は東北から南は九州地方までの57人の選手が集まっていました。これだけの人数の同回生が同じライダースポーツをしているのだと思うと少し嬉しく思われ、士気はますます上がりました。

本番1発目は強風でこの競技をするには条件が悪かったですが、思った程は緊張せず、いつもの訓練通りに飛ぶ事ができました。2発目も静穏の中で飛ぶことができ一番うまくフライトができました。しかし3発目を飛ぶ前の日に川上とブリーフィングすると自分たちの出発の頃には背風が入るだろうという予測ができ、そのフライトが一番山場になるだろうと考えて、背風でのイメージフライトをしていました。2人の予測通り、自分たちが飛ぶ頃には風が変わり、自分の前を飛んでいた慶応大学の選手や川上の離脱高度を無線で聞いていると350mを切っていたので「これはやばい」と思いました。

考えた挙げ句、いつもよりもアップを強めに、絶対に滑らないで上昇するという意識で離陸しました。その意識が生きたのか離脱高度は背風中でも400m以上獲得でき、いつもの訓練+背風フライトのシチュエーションだったのでそれも落ち着いてフライトができました。

大会結果は以下のようになりました。

【順位】

個人

井上翔太 1位 241.9

川上 樹 17位 214.3

団体

同志社大学 2位 456.2

この結果が得られたのは、自分だけの力ではなくチームとしての力があつたからだと思います。

というのも、僕と川上は発航順が近く、いつも川上が自分の前を飛んでおり、空の最新情報が常に自分の中にあつたからです。聞いた空の情報に対してフライトプランを立ててから飛ぶことで、いつもと同じコース上で同じ課目をするのができ、落ち着いてフライトできました。

この競技で大事な事は、大会までの期間でいかに色々なシチュエーションの空を考え、その中でいかに同じフライトが落ち着いてできるようになるかということです。本番ではそれを大会だと考えずにいつもの訓練に関東や九州地方の人が参加していると思えば自然と緊張がほぐれ、訓練でしていたフライトがほぼ出せます。これを肝に銘じて来年は頑張つてほしいと思います。

私たちの練習に付き合つて下さつた教官、応援してくれた部員やOBさん、皆さんの協力があつて、この勝利があると思います。本当にありがとうございました。

次は同志社が団体で1位を取つてもらえるよう、2年生には自分たちが習つた事を全部伝える仕事をしたいと思います。

お詫びと訂正

本誌昨年号に校正ミスによる間違いがありました。ここに訂正しお詫びいたします。

●目次ページ下 写真説明 AIONIII (ASW28-28) とあるのは AIONIII (ASW28-18) が正しい。

●30 ページ写真説明 吉岡名穂絵 OG とあるのは、吉岡名保恵 OG が正しい。

2. 関関同立戦

2年生 中谷パウル玲雄

関関同立戦初出場を終えての感想を綴りたいと思います。

まず成績から言いますと、団体準優勝、個人3位、5位でした。今年は色々な事が今までとは違いました。台風の直撃により前半は潰れ、競技日数は5日間に急遽短縮されました。そして周回できる条件は出ず、滞空点のみの戦いとなりました。さらに、部内唯一のライセンスである四回生の窪田さんが学会等で欠場されたために、同志社から出場する選手は全員初出場、ソロ出たてのヒヨッコでした。

自分は一応、同志社選手の中で一番ソロに出ていましたが、それでも6発と1桁台。夏に出たばかりでした。その為、ライセンスを何人も擁するKGや立命にはとても敵わないと思っていました。経験でも技量でも上の相手に勝てるとすれば、それは運と作戦だけです。ご存知の通り、グライダーは天候に大きく左右される競技です。妻沼のように一日中、周回できるような条件が出ていれば別ですが、木曾川ではお昼時に少しの時間条件が出る事がほとんどです。その為、得点のチャンスは限られます。しかし、運良く自分にチャンスが回ってきて、相手に回ってこなかったとしても、チャンスを物にできなければ意味がありません。そこで、大会までは過去の翔友や方向舵でサーマルの見つけ方をひたすら勉強しました。地図と失高表も自分の基準でもちろん作成しました。木曾川に行ってからOBさんや教官から木曾川の特性等を聞く事が出来、とても参考になりました。

経験の差を埋めるべく、色々和机上で準備をして挑んだ競技会ですが、幸か不幸か様々な事が起きました。まず、競技会の日数が減った上に周回できる程の条件が出なかった為、チャンスを掴め

た一度の得点で一気にリードできるようになりました。しかも、ヘリのCAB試験等で空域制限がかかったり、WTトラブルにより競技中断といった事が何日もありました。さらに、最後まで滞空点勝負となった為、ただ粘るだけ（といってもかなり苦戦しましたが）だったので、周回競技素人の自分でも、経験不足だった点が多少なりとも表に出ずに済んだと思います。

競技初日はヘリのCAB試験で空域制限がかかったりしつつも立命四回の坪井さんが12分滞空し、2点得点したのみでした。同志社は三回の穂積さんと自分が交互に飛び、西側空域でサーマルが発生しそうな場所を探索しました。

二日目も空域制限がかかり、条件も無かった為クルーフライトばかりでした。

三日目はKG四回の山本さんがアステアで17分滞空しました。同志社は二回の松本が丁度同時に上がったのですが、アステアとのセパレーションが取れないまま、高度を上げる事ができず降りてきて悔しがっていました。立命は植村さんが11分で1点得点しました。その後WTがエンストし、発航不能となった為撤収となりました。これで1位がKGの7点、2位が立命の3点となりましたが、競技会というには寂しい状況でした。この時自分は、このままなら得点が一桁のまま順位がつくという、2年前のような事もありえるな。等と悲観的に思っていました。

四日目、競技できる日数が残り二日間となったこの日、なんとかWTも復活し、競技を再開する事が出来ました。午前中にあった逆転層は日射と共に消え、徐々に条件が出始めました。自分は朝のクルーフライトで偵察し、いつも通り天候をチ

ェックしました。その後競技が始まり、1 発目で自分が ASK-21 で飛びました。同志社は発航順も1 発目だったので、他機に邪魔される事無く、色々な場所へ行けました。サーマル旋回をしつつ東海大橋西詰、ビニールハウス、小学校、土手上と周り、クルーフライト時からの変化を見つつ、ギリギリまで攻めてから帰るという予定通りの飛行ができました。そしてすぐに2 発目でもう1 度飛び、偵察でサーマルが成長しそうだと思ったビニールハウス上空でサーマルを掴みました。離脱 480m で、ビニールハウス到着が 380m 程でした。そこからサーマルの強い部分に入るまでに 300m まで失高しましたが、その後北西風に流されつつ、高度 500m まで上がる事ができました。R/W 上空を旋回しつつ通過し、東側の限界まで行きました。その後サーマルトップにきてしまったようで、サーマルが弱くなったので、東側で他のサーマルを探しました。しかしどこも強い沈下帯だったので、帰る事にしました。結果、20 分滞空で 10 点の得点となりました。チームメイトが自分を信じて 2 発目に送り出してくれた事、OB の篠原さんのアドバイスによりビニールハウス周辺にサーマルがしやすいと気付けた事。それらが重なり、初得点ことができました。同時に飛び立った関大二回の縄手も 14 分滞空し、4 点で総合 3 位に入ってきました。

そして競技最終日。朝のクルーフライトで一回の森山が 2 発飛び、西側の指定したポイントへ偵察に行きました。その後競技が始まり、自分自身で西側へサーマルの成長具合を見に偵察へ行った後すぐに 2 発目を飛び、1 発目で見つけたできたばかりの弱いサーマルを掴みましたが、上手く粘れずに三回の井上慧さんに交代しました。風が北

西から北東に変わったので、慧さんは北東へ偵察に行きました。そして降りてきてから 2 発目、東側の小学校上空でサーマルを掴みました。しかしこの時、丁度同時に風が北西に変わり、西側で 13 に乗った縄手（関大）と 23 に乗った植村さん（立命）が滞空し始めました。西側組は空域オープンを申請し、縄手が 600m 超え、植村さんが 750m まで上昇しました。条件が無くなりつつある東側でも、21 に乗った慧さんが必死に粘ってくれて、15 分 58 秒で 5 点得点となりました。しかし、後にこの 2 秒足りない 58 秒に同志社は泣きます。

慧さんが降りてきてから自分に交代し、21 で西側へ飛びました。縄手と植村さんが滞空し始めたポイントと、午前に自分が偵察してサーマルが成長しつつあったポイントが同じだったので、離脱後すぐにそこへ向かいました。500m で離脱してからサーマル発見時に 350m、サーマルを掴んだのが 300m と、沈下を通過してきた為、高度を 200m も落としてしまいました。安全ラインの 250m までの余裕が 50m で、しかも 13 時の最終発航までも時間が迫っており『今ここで降りたら得点できずに終わる』という緊張感がありました。条件は下り坂で、縄手や植村さんも高度を落としてきており、プラス 1 から 2 も小さいながらありましたが、自分の技量ではコアに入れず、しばらくゼロ粘りが精一杯でした。少ししてから縄手のチェック通過の無線が聞こえた頃、プラス 1 の中に安定して入る事ができ、高度を 430m まで戻すことができました。しかし R/W 上空を流されて東側空域の南側にまで来ており、これ以上離れると危ないし、上昇率も減ってきた事から来た道に戻る事にしました。少し進路を変えるとマイナス 2 があり、風上側に向かってプラスから外れないよ

うに進みました。植村さんの23と同高度の400mになった頃、お互いに接近しましたが、植村さんが譲ってくださったので、弱いプラスの中に留まる事が出来ました。植村さんはその後沈下に突っ込んでしまい、チェック通過へ…『東海関西では譲らない』と言われました。(笑) その後しばらく粘りましたが、沈下が増えてきたので自分も帰りました。時間は34分で、24点でした。山本さんがアステアで20分滞空してから自分の少し後に帰ってきて、ようやく競技終了となりました。

最終成績は、最終日に36点獲得し合計40点となった関大二回の縄手が個人優勝し、縄手のマンパワーで関大が40点で逆転優勝しました。そして同志社は慧さんの5点と自分の34点で、合計39点の団体準優勝でした。なんと優勝とは1点差、しかもあと2秒、58秒から1分になっていれば同点で優勝だっただけにとても悔しかったです。しかし、驚きはこれだけではありません。なんとさらに1点差で団体3位は立命の38点でした。4位はKGの17点と続きます。そして個人では準優勝が立命三回の植村さんで36点、3位が自分で34点でした。まさに、接戦。団体も個人も、ほんの少し何かが違えばひっくり返ったかもしれない、善戦ではなく、勝てる戦いだった。そう思わせる戦いでした。

今回同志社以外で得点した選手は全員アメリカフライト組で、発数も200を超える選手達でした。サーマルを掴む技術ではやはり差を感じました。純国産の同志社勢、それも初出場でここまで戦えたのは運だけでなく、何度も偵察を繰り返し、様々なアドバイスや情報を頂きながら戦えた事、そしてマンパワーでなくチームで得点できたからだと思います。しかし他の選手に比べて自分達がサ

ーマルソアリングについて経験不足な点は否めず、縄手や植村さんには個人では絶対に勝てなかったと思います。様々な教官に『パウルはサーマルを見つけるのは早いですがその後がダメだ』と言われ、もっと条件の出る場所でサーマルに触れて練習しなければならぬと言われました。確かに、基礎的な技量も必要ですが、全国大会で勝つにはサーマルで効率的に上がらなければ意味がありません。見つける事はある程度、事前の準備や当日の偵察でできましたが、実際には上昇する事自体はまだまだ全然ダメだと自分でも実感しました。また、実際にサーマルの中で練習する事の重要性を知った事で、慶応や早稲田が何故大会で使用できないデュオディスクスを所有しているのか？という疑問も解決しました。いずれ、この見つけた後で上がれるかどうか、という差でまた勝てるチャンスを逃しそうなので、これからは競技会に向けて、積極的にサーマルを掴む練習をしようと決意し、帰り道も慧さんと『来年は絶対に優勝』という話をしました。

今回の関関同立戦では、当初の目標であった『得点』を超える結果を出し、強い選手や競技会の空気に触れ、得る物もかなりたくさんありました。にも関わらず、非常に悔しい気持ちで一杯です。来年は自分も三回生になり、経験不足という言い訳はできなくなります。さらに、同期の井上翔太をはじめ、チームメイトに恵まれた世代なので、与えられたチャンスを無駄にしないよう、この悔しさをバネに、次の目標に向かって今後さらにステップアップしていきたいと思います。

3. 東海関西学生グライダー競技会

4年生 窪田 倫子

集合日・Day1,2

今大会、同志社は単独チームとして出場しました。

初日にチェックフライトを済ませクルーのフライト希望もなかったのですが、実地試験後にフライトができていなくて、緊張したフライトになってしまっている部分を埋めるために自分のフライトをしました。

搭乗前の報告の手順に漏れがあるなど、前年度まで競技会にクルーとして参加していたものの、あまりピスト側にいることが出来ずウインチばかりだったので、大会中のピスト側の雰囲気や進行が分からず、頼れる先輩がいない分、余計に戸惑った部分が大きかったです。翌日もマラソン大会が無くなったため、初日と同様の練習日となりました。

Day3 (競技 1 日目)

この日は予報通り、夜から明け方にかけて雨が降り、西高東低の気圧配置と前線に吹き込む風の影響で風が訓練基準を満たさないため宿舎で開会式をし、ノーコンテストとなりました。

Day4 (競技 2 日目)

天気は高気圧の前面に入り、また寒気も降りてきて競技会日和となる予報通り、風は穏やかで条件爆発の日となりました。

条件が出ると予想していた時間よりも早い段階で滞空する機体も出てきて、ほぼ全チームが周回をし、この日の得点は周回にかかった時間と、写真等の減点の大きさに左右されるという結果になりました。自分もクルーに助けてもらい周回をしましたが、第2旋回点でセクター外があり減点になりました。この日の得点は以下のようになりま

した。

1位	京大	1832.8点
2位	立命	1685.6点
3位	名大A	1680.7点
4位	名大B	928.0点
5位	龍谷	860.8点
6位	同志社	792.3点
7位	名工	722.7点
8位	大工府大	708.4点
9位	関学	162.0点

Day5 (競技 3 日目)

天気は高気圧の後面に入り、低気圧の接近による雲が広がり、滞空点が取ればいかなという状況でしたが、朝のうちは逆転層があり雲にも覆われていた為、なかなか日射で地面が温まらず、ポコポコしていても上がることは出来ず得点者は出ませんでした。

Day6 (競技 4 日目)

この日の天気は前線を伴った低気圧の影響で前線の通過で雨を伴わなければ、急な風の変化が競技にどのように影響するのか、上空との気温差もあまり期待できなかったのが、風の変わり目の少しのチャンスがあるかどうかという判断の難しい1日でした。しかし、残念なことに、滑空場上空を雲域の伴った前線のしっぼが通過したため慌ただしい撤収となり、ノーコンテストとなりました。

Day7 (競技 5 日目)

この日の天気は競技2日目と同様に条件が爆発し、また横風も強くなる予報でした。朝から昼前までは逆転層が取れずに全選手バッタフライトで

した。しかし、日射が出てきて地上も温まりはじめ、粘り始める機体も出てきました。そのすぐ後に、サーマルが勢いよく成長したのか、タイミングよく上がった機体は見る見るうちに高度を稼ぎ、周回・ワンポイントをする機体がいくつか出ました。その後は、横風が強くなり、発行スタンバイのち撤収となりました。

Day8 (競技 6 日目)

天気は競技 3 日目とあまり変わらず、条件も期待できない日となり、得点者はなく終わりました。

Day9 (競技 7 日目)

競技最終日となるこの日は、前線を伴った低気圧の勢力下に入り、朝から雨が降りノーコンテストとなり、宿舎での閉会式のみとなりました。

【結果】

結果的に、今大会で大きな得点に繋がる日は、天気に恵まれた 2 日間のみとなりました。発航順番や運を掴んだ人が得点できたと言ってしまえばそれまでですが、カメラや自記高の不備はもちろんのこと、フライトに関しての準備不足が響く大会だったと思います。今後、大会に出場する選手には、仲間と情報をしっかりと持って良い成績を残せるよう頑張ってくださいと思います。

最終成績は以下のようになりました。

団体	1 位	立命	1904 点
	2 位	京大	1833 点
	3 位	名大 A	1790 点
	4 位	大工府大	1408 点
	5 位	名大 B	940 点
	6 位	関学	216 点

個人	1 位	植村 (立命)	1064 点
	2 位	谷一 (京大)	950 点
	3 位	浅井 (名工)	941 点
		:	
	9 位	窪田 (同志社)	792 点